

宿敵（一）（弓場直彦）

三度 刃を 交えて 生死を 決せず

仲秋 羅城門に 雌雄を 定めん

妖鬼 茨木 薨に 高く 寄り

綱は 剣を 執つて 地に 鎧 燦々

月神 既に 消えて 雲 妖変す

互いに 揶揄を 飛ばしつつ

腕 必殺の 機を 探り 合う

腕 必殺の 機を 探り 合う

宿敵（二）（弓場直彦）

一瞬の 氣息 命運を 分かち

卒然と 風雨 何処より 来る

突 紫電竜 走り 轟雷 落つ

浄火 土を 打つて 羅城門 炎上す

解説 羅城門で渡辺綱が鬼の茨木童子との雌雄を詠った詩。

語釈 ※羅城門Ⅱ都城を囲む城壁にある門という意味。平城京、平安京の正門で京の南面中央にあり、朱雀大路を隔てて朱雀門と対する。※三度刃を交えⅡ渡辺綱と鬼の茨木童子の対決が三度目。※雌雄Ⅱ勝ちと負け。勝敗。※薨Ⅱ屋根のいちばん高い所。※燦々Ⅱ輝く。※月神Ⅱ妖変Ⅱあやしい変事。※揶揄Ⅱ対象をからかって面白おかしく扱うこと、皮肉めいた批判によって嘲笑的に扱うこと※氣息Ⅱいきづかい。呼吸。

※命運Ⅱめぐりあわせ。運命。※卒然Ⅱ事が急に起こるさま。だしぬけ。突然。

※紫電Ⅱ紫色をした電光。※轟雷Ⅱ音が荒々しく鳴り響く雷。※浄火Ⅱ神聖な火。清浄な火。

通釈 （一）渡辺綱と茨城童子は三回戦い生死を決することがなかった。この秋に羅城門で勝敗を定めたい。鬼の童子は屋根から綱を威嚇し、綱は剣を引つさげ輝く鎧を纏い地上で待ち構える。月神は光が消え雲は怪しく変化している。互いに揶揄を飛ばしつつ、チャンスを覗う。

通釈 （二）一瞬の呼吸が、命運を分けた。綱が童子を仕留めると、出し抜けに風が巻き、驟雨が降り注ぐと、突然紫色の電光が走り、轟雷が落ちた。天からの清浄な火は羅城門を炎に包み、羅城門と童子は燃え尽き消え去って行った。